

2022 年度須坂市文化財取得審査会 議事録

【日時】 2022 年 8 月 19 日（金）午後 1 時 30 分から午後 4 時

【場所】 須坂クラシック美術館

【参加者】

〔委員〕： 霜田 英子 長野県立美術館 学芸課長
小林 尚子 北野美術館 事務長（学芸員）
勝山 滋 平塚市美術館 学芸担当長
田中 義人 元美術教師
齊藤 澄人 須坂高等学校 美術教師

〔欠席委員〕： 荒木 伸貴 株式会社 高島屋 MD本部美術部 美術担当次長
（書面により意見を提出）

〔事務局〕： 小林教育長、峯村文化スポーツ課長、中村文化財係長、千葉文化財担当係長

【配布資料】

- ・ 次第
- ・ 取得審査会委員名簿
- ・ 須坂市文化財取得審査会条例
- ・ 絵画の取得に係る須坂市文化財取得審査会への諮問書
- ・ 取得予定絵画「華園三題」について

【会議の状況】

1 開 会（千葉担当係長）

2 あいさつ（小林教育長）

3 人事通知書交付

4 会長・副会長の互選について

互選により、会長を田中委員、副会長を齊藤委員とした。
事務局も含め出席者が自己紹介をした。

※ 会長より、自由で率直な意見交換の場とするため会議は非公開としたい旨提案があり、委員全員が、非公開が適正との意見であった。このため、須坂市附属機関等の設置及び運営に関する指針に基づき、以後の会議を非公開とした。

5 会 議

（1）文化財（日本画）の取得について

資料に基づき取得予定絵画及び今回の諮問内容について事務局より説明。

欠席の委員からの意見について事務局より説明

事務局：事前に提出いただいた意見は以下の通り。

岡信孝氏は、数々の革新的な日本画を発表し日本近代美術史において大きな足跡を残した文化勲章作家、故・川端龍子の孫にあたり、義父に濱田庄司と偉大な美術家の家系にあり、その画業においては、龍子没後は、龍子と縁の深かった奥村土牛の薫陶を得ます。

伝統的な様式美や装飾性を加味した岡芸術は、その祖父の画境を引き継ぎ、日本の伝統文化に根ざしながらも現代に相応しい日本画表現を求めて制作を続ける、画壇で評価の高い作家です。また、卓越した審美眼から古美術の蒐集家としても高名で、須崎市には氏のコレクションが多数寄贈されています。

本件作品は、自邸の庭に咲く花々を「華園三題」として、2020年に二曲屏風三点を描き、米寿を自祝された記念の作品となります。日本の四季の移ろいや自然への敬慕を、琳派に代表される装飾性や伝統的な様式美を採り入れながら独自の視点で描かれてきた岡芸術の卓越した色彩と構成感覚で表された佳品です。

本件作品の評価額につきましては、現時点での百貨店や画廊での岡信孝氏の新作発表価格（号単価 25 万程度）を基準としております。

事務局：さらに補足説明で、電話でお伺いしたことなどを口頭で補足すると、実は平成 29 年 8 月 17 日に、岡信孝氏の作品の取得にかかる文化財審査会を開催している。その時の審議案件は 30 号の日本画で、当時の委員であった高島屋の金子様より、

「作品のサイズが大きくなればなるほど、購入できるお客様が限定されていって、商売の機会が減っていくのと、見た目のサイズ感のわりには、割高に感じてしまう。サイズが大きくなるにつれて、号単価の割合が低減していくように価格設定をしていくのが画商の慣例となっている。号単価×号数が、きっちり計算通りというのは、サイズでいうと 8 号程度から 12 号程度までで、それ以上は割安に、それ以下は逆に割高になる。あくまでも慣例なので、厳密には画商によって計算の仕方が若干異なる場合もありますけれども、大きくは変わらないと思う」といった趣旨のコメントを、当時いただいた。これについては、今回は、「今回の案件についても同じことが言える」ということで、単純に号単価×号数ではない、とのことだ。

さらに、岡信孝氏クラスの、個人号単価 25 万円程度の作家の屏風であれば、おおむね 1 点 1 千万程度ということで、今回 3 連作ということで、合計 1,400 万円という評価額になっているということであっている。

また作家によっては、画商、画廊、つまり店ごとに評価額が異なってくるということが多いが、岡氏の作品については、ほぼ同じような、一定の評価額になっているという回答を得ている。

会 長：それぞれ専門的な立場から、今回の作品の取得についてご意見、質問、忌憚のないものをお寄せいただきたいと思います。

委 員：当館には当館としての明確な作品収集方針がある。それに沿って良品を集めると

いう形で成り立っている。館内を見学して、ここはいわゆる岡氏のコレクションを邸宅に展示するということで、いわゆる美術館的施設と言う分類ではなく、博物館的だ。そうは言っても、こういったものを集めていくと言うか、コレクション方針はあるべきと思うが、お聞きすると、方針は特段明文化されていないということであり、そこは気になる。

委員：当館もある程度の収集方針は持っている。クラシック美術館は須坂市立であるので、市民の皆さんの益になるような収集方針があると思う。そのことに今回の作品購入が沿ったものになっているかが重要である。

個人的に言えば、今回の作品は素晴らしい作品であると思う。岡氏も体調を崩され、遠くにスケッチに行けなくなったにも関わらず、出来る範囲で自宅の庭にあるものを写しとってここまで描けるという、人生上のひとつのエポックというか、画期となる記念となる意識で描かれているというふうに見た。

当館で展示をする際にも、この作品が作者の人生の中のどういう状況にあった時にこの絵を描いたのかという内容のキャプションを付けると、来場者に非常に興味を持っていただける。そういう意味でも、この作品は、意味のあるものと考えられる。

今後も岡氏の作品を充実させていくものと思うが、その場合に、この現状の建物では収蔵・保管・展示スペース等でだんだんと無理が生じてくるだろうと感じるので、そのことも含めて市として考えていくべきだ。

また、今回の取得に対していろいろなご意見をお持ちの方がいるようだが、どういったご意見があるのかを知りたい。

委員：公立美術館で作品を収集するには、館の一存でなくて外部の先生方に評価してもらって、しっかり根拠のある算出をする必要がある。当館でも選定委員会・協議会を開催している。

評価額の1,400万円と購入価格600万円という部分については、高島屋美術部とかで売られる値段と違ってくるのは当然と思う。市の予算で購入するためにはいろいろと手を尽くすものだ。その点ではクラウドファンディングはとてもいいやり方だと思う。クラウドファンディングは返礼品が必要にはなるが、一定の、市に対して何かしてあげたいと志のある方からすると、受け皿になっていいと思う。岡氏がこの建物を気に入って、是非ということで多くのものを寄贈されたという過去の経過を、しっかり説明をしながら取得するということになるだろう。

今の日本画家は美大を出て、授業で習って絵を描くシステムチックな絵が多いが、岡氏は川端龍子の内弟子で、稀有な存在だ。スケールの大きい空気感を出す作風で、スケッチ旅行で書くことが多かったが、近ごろは体調もすぐれない中で、庭の一隅の植物を描いていくという姿勢に良さを感じる。米寿を迎えた人の偽りのない作品だ。

委員：作品については、非常に華やかな感じで、この建物と共に生きているというか、呼吸しているのが感じられて、とてもドラマチックだと感じる。

委員：やはりお金をかけて美術品を買うことには、色々な考え方があると思うが、岡氏のコレクションを見ると、岡氏自身にすごい審美眼、いいものを見る目があると感じる。これからもっと岡氏の作品を充実して、特色のあるクラシック美術館、ここに行けば岡氏の作品が総合的に見られるという方向に持っていけばよいだろう。今後も、岡氏の作品をクラウドファンディングでますます充実させてほしい。金額については、デパートなどで展覧会をやると高値がつくのは仕方がないことだ。評価額は1,400万円だが、600万円くらいにしていただけなのであれば、それはよいと思う。

子どもたちにどう見せるかについては、親しみが持てるような方向を考えて、活用してほしい。大人向けの市民学園とかそういうのでは、かなりクラシック美術館の建物自身を見に来ている。そういう中で、建物に調和したいい作品だと思う。

委員：購入金額については、1,400万円ではないということでしょうか。

事務局：1,400万円は評価額で、今回取得する場合の金額は600万円ということを、岡氏の方からご提示をいただいている。

委員：その場合、間に全く画商などを介さずに、直接岡氏とのやりとりという形をとるのか。

事務局：画商などは介さない。

委員：ケースバイケースだが、間にそういう人を挟むと手数料が入るので値が上がることもあるが、いろいろなトラブル回避ということであえてそういうところを通して購入する場合はある。

委員：岡氏がこれならお譲り出来るというふうに提示してくれた金額なのだろう。

事務局：そのとおりだ。今回の件は、岡氏が体調もあまりよくないということと、こういった大きな作品はもう描けないということで、自分の中ではこれが代表作になるだろうというお話の中で、これまでの須坂市との関係などからクラシック美術館に収蔵していただければということでお話があった。

会長：特にご意見なければ、岡氏のご意向もあり、文化財として取得するのは適當だと思うので、審査会の方針にしてよろしいか。

委員：異議なし

事務局：2点質問したい。

まず、絵を見た時に、下が緻密に描かれているのに対して、上が甘いと言うか、

あまり上手く見えないという感想を述べる方もあるが、岡氏の作品が、日本画の画壇の中でどう評価されているのか。この作品としての評価もお伺いしたい。もう1点は特に子どもたちへの情操教育について、具体的な活用方法やこの絵から学べることなどをお伺いしたい。

委員：当館の場合、学校と連携して、生徒に来てもらい、絵の前で5、6人のグループで発言してもらって、ボランティアが意見を出す手助けをするという、一人一人見るのではなく絵をコミュニケーションの道具・ツールにする「対話型鑑賞」というのをやっている。こうした活動を小中学校に募集して、少しずつでも広げていくとよい。

また、デジタル発信は諸刃の剣ではあるが有効であるので、ホームページで所蔵作品を市民の財産としてこういうものがあると発信し、最終的には館に来てもらうようにする。

作品・作風については、特に椿などは、岡氏のメインモチーフで先生らしい。葉も日本画ではきれいな緑青で描きがちだが、深みのある緑で描いている。地面を描くというのも、もともと大正時代に多くの画家が花鳥風月を重んじるような院展の中で、川端龍子が土の暖かさとか、古典主義に対する自然派という意味合いで土を描いたと言うのがあり、そこも引き継いで地面の部分を細かく描いているのかもしれない。葉の葉脈も細かく金で描くような作品もあってもいいが、岡氏は塗る感じで固まりとして捉えて上手く作品に仕上げているやり方であり、これも、もともと油絵を描いていた川端龍子の描き方を内弟子でしっかり勉強して出てきたものかと思う。

5、6年前に亡くなった院展の理事長だった松尾敏男先生がおっしゃるには、「美術作品は80パーセントで止めておいて、100パーセントで描かないようにしないといけないんだ。100パーセントで描くと100パーセントで終わるが、80パーセントで描くと鑑賞者が色々絵を見て、色々想像して頭の中で完成させて100パーセントにも120パーセントにもなるんだ」ということをおっしゃっている。松尾敏男先生も堅山南風の内弟子として勉強した方なので、今は稀有な存在。今の日本画は、写真を引き写しにしているような作品が多いが、そういうのではなく、自分の目で見て描く岡氏のよいところがでた作品だ。

委員：情操教育に絡んで、子どもにどのように美術作品を鑑賞させるかということだと思うが、「対話型鑑賞」については、熱心な美術館がある。「対話型鑑賞」はいわゆる絵を前にして子どもたちが思ったことをいって、それによりコミュニケーションを重ねて、連想ゲームのように広げていくという手法。もともとは80年代のアメリカで始まり、連綿と日本の一部の美術館、教育普及にすごく力を入れている美術館で行われてきたが、当館も力を入れていこうということで、教育普及部門学習担当専門の学芸員を雇って、その人を中心に対話によって鑑賞を深めるということを今後行う。自分で思ったこと発して、それを聞くということの繰り返しで思考が深まる。そういう意味で有効なメソッド。定期的に2カ月に1回のペースで、「おしゃべりしよう」という、そのような活動をしている。

かつ学校プログラムといって、学校単位で鑑賞というか、美術館に先生が連れて来てくれるので、その時にお申し込みがあれば学芸員が付いて絵の前でいろんな投げかけをして、それに対して子どもが話をして、作品について知って、鑑賞を深めてお家へ帰ってもらう。それをお父さんお母さんにお話して今度お父さんお母さんが美術館にやってくるというような、いい循環ができるということで、かなり力を入れている。

委員：教育現場で「対話型鑑賞」というのは合言葉のようになっている。

それまでの美術鑑賞は、個々に好きなものをじっくり見て、以上。という感じだったが、対話型鑑賞が生まれたことで、作品を媒介にしてコミュニケーションする。もともとアートというのはコミュニケーションのツールだと考えるようになって、その見方は一つではない。美術のいいところは、見方はみんなちがってみんないいので、誰の見方も認められる。例えばある方が、なんで下の部分だけ細かく描くんだという風に見たなら、「すごいところに気づいたね」ということ。なんでそういうふうを描いているのか考えてみよう。といったとき、他の子がもしかしてこの作品の主題は下のところにあるんじゃないというのが出てくる。箔は散らばっているが一番密集しているのは地面だ、細かく描かれているし、葉を見ると一つ一つ全部色も形も描き方も違う、大きな植物の下に小さいけど輝いている植物がある、というふうにやっていくと、まして岡氏の置かれている状況などのストーリーが加わると、どーんと腑に落ちて、ただきれい、ただ細かいではなく、もっと立体的に絵を感じられる、そういう体験が、体験型というか対話型であり、そういうふうに見ていけば素晴らしい機会になる。

またこれは屏風なので自立するし、額に入った平面のものとは違う。屏風のすごさは置く場所によって呼吸が変わること。屏風は時間が変わるとか日差しが変わるとかで、見え方がかわるという発想は、日本独特のものだと思うし、そういう意味でもドラマチックだ。

委員：ライトを当ててもよいが、自然光で見ると、本当の姿が見えるとか、場所によっても奥ゆかしい場所にあるとまた違うとか、諸々のことを感じられる。

そもそもの話になるが、批判的な方がいるとすればもったいない。せっかく熱を持って、芸術に税金をという熱い思いを持っているのに、批判的なまま「こんなものを買って」というままになるのは切ない。批判的な人も巻き込んでみんなで考えてみんなで楽しみましょう、というふうになるとよい。

委員：会議の冒頭、傍聴者のなかで何か言われた方がいたようだが。

事務局：傍聴にみえた方々のなかには、以下のような意見を持っている方もいる。

一人の作家の作品を何故何度も買う必要があるのか。

財政状況も厳しく一度は断った経過があるのに、なぜ買うのか。

岡氏の絵を買うことが市民に有効なのかどうか、もっと他に、税金の使い道として優先順位の高いものがあるのでは。

600 万円の金額について、これは岡氏の言い値ではないのか。
そういった意見がある。

委員：美術品の価値は見る人によってとらえ方が違う。横山大観の作品でも、価値がないという人もいる。そういう方にはその都度美術品としての位置づけを説明するしかないが、その人が言うには、金沢 21 世紀美術館は、人を呼べるプールの作品がある。そういう作品がなければならないという。必ず人を呼べるものがないとか、所蔵品の悪口も言われるが、それはその人の価値観で仕方ない。

600 万円という金額も、これまでいろいろ作品やコレクションを寄贈していただいたり、ということがあってのことだと思うし、作家はとにかく、次回作こそ自分の代表作だというのが普通なのに、もう 88 歳に近くなって「これが代表作だ」と言ったお気持ちを考えると、ほかに岡氏の新作でこのクラスの作品はもう買えないと思う。

須坂はいろいろな観光地と連携して、スタンプラリーをやったりクイズラリーなどのやり方もあるし、うまく人が市内施設を遊覧・循環するような、ひとつは金沢 21 世紀美術館のプールの展示のように、まずは岡先生の作品から入っていくというような展示ができるとよいと思う。

委員：現時点で、須坂市で岡氏の作品を展示しているのはクラシック美術館だけだが、他の施設と連携して、版画美術館の展示室を借りて展示するとか、市内の文化施設、博物館・美術館が連携してみせる。というのは美術品の収蔵がここは難しいし、収蔵庫も一部屋だということもあったので、例えば須坂市全体を一つの博物館として考えて、近代の美術品はここなどと、どこかを専門の収蔵庫とするようなことを考えてはどうか。

こちらで岡氏のものをあつめて、研究することも必要になってくるのではないかなと思う。

委員：今回、代表作を購入して、岡氏の作品の収集は終わり、のようにならないほうがよい。今後どうしていくかという構想というか、見通しはあった方が、市民の方も納得できる。説明不足だと、行き当たりばったりで作品を買っているじゃないか、というように思われる。

そのためにも作品の収蔵の部分について考えたほうがよい。環境等、美術品の保存保管に力を入れてほしい。

委員：岡氏の作品をさらに収集し、充実させていくという方向が必要ではないか。須坂市には福井敬一の作品群も全作品を寄贈してもらったが、展示するところがない。そういう建物の連携も、これから考えてほしい。クラシック美術館には岡氏の作品群があるという方向で、市民や子どもたちに足を運んでもらうということだ。そのために色々と手を尽くしていけばよいのではないかな。

委員：こだわるようだが岡氏自身の見せ方を工夫していくということを前提にしては。

当館にも屏風はあるが、子どもたちは屏風というだけで珍しいと感じてくれる。ケースに入れず飾ってあるものも普通はないし、親御さんも近寄らないようにするけれど、子どもはめったなことはしないのでそのまま見せている。屏風という存在自体が子どもをワクワクさせる。収蔵ケースの中でなく、日の光で、暮らしの中にあつたものとして見せていけばいいと思う。

岡氏が須坂市民にどの程認知されているのかわからないが、そのあたりも併せてアピールする必要がある。岡作品が増えたから見に来てというだけでは弱い。もともとゆかりのある人なのだから。

委員：公立美術館だと、やはりゆかりが重要だ。地元に生まれたとか。来館者も、「だから集めているんだ」と納得できる。

委員：小学校3年生くらいで郷土の歴史を勉強するが、そういう機会で美術鑑賞ではなくて、地域探検みたいな、社会見学のなかで岡氏の説明をするといいのでは。そういう視点で、こういう人でした、こういうものを集めていました、のようにやるいいのでは。最初から美術鑑賞しましょうというとなんか難しいし、構えてしまう。

委員：この建物自身は、ここはもともと美術館ではない。暮らしの、須坂の生糸の町の歴史的な建物だったものを岡氏が気に入り、コレクションを寄贈してくれたのが美術館の始まりだと聞いているので、そういうことを知らしめていけばいいのでは。

委員：道路の計画まで変更したというのはすごいエピソードだ。

委員：市民の皆さんは町に誇りをもっている。そういう観点から、この建物を盛り上げるために岡作品を収集するということ。この町並みの中に、立派に残っているクラシック美術館という建物のなかに岡作品があるという、全体で盛り上げていくというやり方もある。

委員：町並み保存の熱意を物語る建物がここにあるのは素晴らしいと思うし、岡氏の作品は、その中にある文化財としてふさわしいと思う。

委員：繰り返しになるが、美術品の保存保管について考えてもらいたい。素晴らしい建物の中にある、素晴らしい作品の保存・保管を少し考えてもらいたい。

委員：着物という湿度などに弱いものを主力として収蔵されていることもあるので。

委員：提案として、作品群を「岡信孝コレクション」として、市外の他の美術館・博物館へ貸出して展覧会ができるようにしてはどうか。そうすれば、市の中の人も、「ああいう美術館で我が町のコレクションが展示されて、来場者がこのくらい入ったんだ」と返ってくると思う。美術館側は予算の関係上、ワンコレクション（一

つの美術館のコレクションのこと）でトラック1台・2台で借りてこられるのは魅力だ。1館から借りたものだけで1つの展示ができるのは強み。着物のコレクションというのも面白い。よその美術館に提案しては。新聞社を絡めてもいい。もうひとつ、何かことあるごとに記者発表をするとよい。寄贈が決まった記者発表の日に、花の種類が分かるような方を読んできて、美術館の学芸員と対談してもらおうとか。それを新聞に載せてもらえば、これからも活用していきます、というのが分かる。しつこく記者発表すると良い。

日曜美術館という番組もディレクターが色々探している。岡信孝コレクションのこういうのを展示します、みたいなものを送って、最後の15分の枠のアートシーンというコーナーでいいので、展覧会紹介など宣伝して、アプローチしていくことも有効だ。

会 長：ぜひ行政として参考にしてほしい。

意見も出尽くしたようだが、この作品は二度と手に入らないもので、買ってよいとの結論だろう。文化財として取得するということで答申としてよいか。

委 員： 異議なし

(2) 答申について

会 長：意見質問はないので答申案を説明してください。

※事務局が事前に作成した答申案を配布。

事務局：お配りした答申案には、本日いただいた貴重な意見は反映できていないうえ、この場で反映させたものを作成するのは困難だ。この後、会長と調整し委員の皆さまに見ていただいて完成させたい。

会 長：答申案は完全な形でないので、委員から出された意見を加味した答申を作成し、委員の皆さんへお送りして最終的には私と事務局にお任せいただくということでよろしいか。

委 員： 了承

会 長：長時間にわたり、良い意見をたくさんいただいた。事務局も大いに参考にしてもらいたい。

6 閉 会 （千葉担当係長）

以上

2022 年 8 月 22 日

須坂市教育委員会 様

須坂市文化財取得審査会

会 長

田中義人 印

文化財（絵画）の取得について（答申）

2022 年 7 月 28 日付 2022 文ス第 50 号で諮問がありました文化財（絵画）をクラシック美術館収蔵品として取得することについて審査した結果、下記のとおり答申します。

記

1 審査事項

取得予定文化財（絵画）の審査

2 審査対象文化財

岡 信孝作 日本画 屏風 二曲一隻（三連作）

「華園三題（かえんさんだい）」（東大寺 椿、紫陽花、白芙蓉）

3 取得方法

購入

4 購入理由

岡信孝氏は、現代の日本画家のほとんどが美術大学を出自とするのに対し、川端龍子の内弟子とした画塾系作家としてスケールの大きな表現と技法に拠っている作家であり、巨匠横山大観をつぐ川端龍子の直系としても稀有な存在である。

また、これまでに善光寺大本願や芝増上寺の天井絵・襖絵を描かれる等、日本を代表する日本画家のひとりとして実績を残され、現在では、定期的に高島屋などで個展を開催され、作品は成川美術館（神奈川県箱根町）始め知足美術館（新潟市）などの美術館でも収蔵・展示されている。

須坂市とのつながりにおいては、岡氏が「元 牧新七家（現：須坂クラシック美術館）」を訪れ、建物の佇まいと都市計画道路敷設予定地を変更し建物の保存する市の姿勢に感銘を受けられたことに始まる。自身が収集した、陶磁器、木工品など身近な生活の道具から、大正・昭和期の着物、ガラス器、李朝民芸・民画・白磁、琉球漆器・壺屋陶器など 2,000 点に及ぶコレクションを寄贈していただき、平成 7 年には「岡信孝コレクション 須坂クラシック美術館」が開館し、歴史的建造物の価値を高め、街並み景観の保存と充実にも資してきた。

岡氏自身の絵画作品についても、すでに御寄贈をいただく等により収蔵しており、平成 29 年度には文化財取得審査会の審議を経て代表的作品 1 点を取得し、合計 37

点を数える。同年 10 月には土蔵に「岡信孝記念展示室」を新たに設け、展示替えをしながら常時岡作品を公開している。

当該日本画については、長年スケッチ旅行などで題材を得てきた作家が、米寿を迎え遠出が困難になりながらも、自邸の庭に材を見出したものであり、一隅の自然に目を向け自然主義的な伝統に沿って大作に仕上げたもので作者の人生そのものを物語るものといえ、その画業を追うためには欠くべからざる作品である。

葉の深みのある緑や、地面の描き方も、川端龍子の影響を引き継いだ自然派で、土のあたたかさが感じられ、写実を追求したものというよりは、自分の眼で見た世界が表現されている。作家の年齢から考えても、新作でこのようなスケールの大作を、今後入手することは不可能であると思われる。

これら美術作品としての価値に加え、当該作品をクラシック美術館に迎えることにより、市民が身近に日本画を鑑賞する機会を提供できるとともに、建物の特質を生かし伝統的な屏風形式の作品を座敷で鑑賞するという展示方法等も可能となる。こうした体験が今後の情操教育に資する部分を含め大きな価値があり、特に伝統的な暮らしの空間に置かれた環境に身を置くことは、柔らかな感性を持つ子どもたちの学びにも繋がるとと思われる。

このように、クラシック美術館の建物を愛し、自らのコレクションを寄贈した岡氏の作品の収集を充実させることは、建物自体や付近の町並みを盛り上げることに寄与すると考えられる。

また加えて、優れた作家の代表作を入手して終わりとするのではなく、さらに作家研究を行い、岡作品を通じて市の文化の発信をすること、良い状態で次世代へ引き継ぐことも重要であると指摘しておきたい。

購入金額については取引の実勢価格として 1,400 万円という評価が示されているが、同氏の申し出により提示された 600 万円で購入することは適当であると考え

る。

以上のことから、当該日本画は須坂市の社会教育、学校教育等に資するものとして、須坂クラシック美術館の収蔵品として取得するにふさわしい作品である。

5 購入予定価格

6,000,000 円（消費税込み）